
ひぐらし ~ After school days ~

シンシヨク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひぐらしのAfter school days

【Nコード】

N3876H

【作者名】

シンシヨク

【あらすじ】

ひぐらしのその後の物語。平和を勝ちとり、時がすぎ、部活メンバーは分校を卒業してから高校生になった。どんな世界が待っているのか。

くはじめに

チュンチュン

朝だ。すでに俺にとっては当たり前なことだが雛見沢の空気はとてもおいしい。雛見沢に引っ越してきてから、もう4年の月日がながれた。

俺は、興之宮高校に在学している。

ピンポーン

家の呼び鈴が鳴った。誰がきたかは確かめるまでもない。俺は早足で玄関に行き、分かっている客を確認した。

レナ

「おはよう！圭一君」

魅音

「おはよう圭ちゃん。早く行かないとやばいよ」

圭一

「よ！レナ、魅音、おはよう。もうちょっと待ってくれるか。」

魅音

「早くしてよー。今日遅刻したら、通算5回目なんだからねー」

圭一

「それは、魅音だけだろうがー！」

魅音

「あつはつはつは。ごめん。でも本当に早くして、お願い！」

圭一

「はいはい。分かったよ。」

本当にレナと魅音もあの頃からほとんど変わってないのが不思議だ。まあひとつ変わったとすれば全員俺を含めて見た目が、大人っぽくなったところか。自分で言うのも変な話だがな。

圭一

「よっ！おまたせ！」

レナ

「じゃ、早く行こ。遅刻しちゃうよ」

俺達、3人はさっさと自転車にまたがり、学校に向かうことにした。ちなみに順番はレナ、魅音、俺の順番で走っている。

圭一

「おつと、ここで一応、この世界の説明を読者にしておこう！ここは『ひぐらしのなく頃に・祭囃し編』のその後だと考えてほしい。それいじょうのことはこの先を読んでくれれば、そのうち分かってくるだろう。」

魅音

「ちよつと、圭ちゃん。一人で何話してんのさー？」

どうやら、遅いので見に来たようだった。

魅音

「ほら、早く行くよ!」

魅音に言われ、早く自転車で走ることにした。

それでは。

～登場人物紹介～

登場人物

～部活メンバー～

前原 圭一 18歳

興宮高校3年A組 金属バット

よく疑心暗鬼に捕われてしまう、ひぐらしの主人公。ただしすでに学び仲間は疑われないようになった

竜宮 レナ 18歳

興宮高校3年A組 鉈

家庭的で仲間思いで面倒見のいい正統派なヒロイン。高校生になって宝探ししなくなったようだ。

園崎 魅音 19歳

興宮高校4年A組 モデルガン

高校でも男盛りでもあり、しっかりした女の子。みんなを引っ張っていくのも相変わらず。

北条 沙都子 16歳

興宮高校1年D組 トラップ

今年から高校入学する、トラップ大好き妹キャラ。ただし高校生となったためトラップは少々自重。

古手 梨花 16歳
興宮高校1年B組 祭事鋤

オヤシロ様の生まれ変わりと言われる、実際100年生きて幸せを手に入れた。現在では基本黒梨花。

園崎 詩音 19歳
興宮高校4年C組 スタングァン

魅音の双子の妹。部活メンバーに入って、仲間となり一番の願いは沙都子の姉のようになること

北条 悟史 19歳
興宮高校4年A組 金属バット

沙都子の兄。1年半ほど入江診療所で眠っていたが、すっかり全快して帰ってきた。優しい性格。

古手 羽入 17歳（見た目）
鬼狩柳桜

?? ?? 19歳
??????????

?? ?? ??歳
??????????

4 / 6 「集合」型

興宮高校 3年生玄関前

俺は、前原圭一、17歳。俺は、いや俺たち部活メンバーはこの興ノ宮高校に入学した。

俺とレナ、そして魅音、詩音と悟史はすでにこの高校で毎日を楽しく過ごし俺とレナは2年間、魅音たちは3年この高校で頑張っている。今までも、勿論楽しかったが今年からはより一層おもしろくなるからだ。

そのりゆうが、今年から沙都子と梨花ちゃんが入ってくるからだこれで、また部活メンバーが同じ学校に揃うと思うと楽しくてしょうがない！

レナ

「圭一君。何やってるの？早くクラス替えみよ」

圭一

「おう！悪いレナ。ちょっと考え事しててな」

嬉しさで忘れていたが、今日から新しい学年、つまりクラス替えがあった。俺とレナは掲示板に張ってある紙から自分の名前を探していた。

レナ

「あ、あった。うーんと、レナはA組だよ。圭一君。」

それを聞いて俺はさらに嬉しくなった。なぜなら

圭一

「本当か？俺もA組だぞレナ」

レナ

「え！本当に！嘘じゃないよね？」

圭一

「こんな、嘘ついてどうするんだよ。本当だって」

レナ

「やったー。圭一君と同じクラス／＼」

同じクラスだと聞いた途端レナの頬が少し赤い気がした。喜ぶのは分かるが何故赤くなるのかはイマイチ分からない。

まあ、とにかく一番の友達が同じクラスなのは俺も嬉しく思っていた。

圭一

「よしレナ。クラスも分かったしさ、まだ時間あるし魅音達のところに行かないか？」

魅音達のところに行けば悟史や詩音もいるだろうからきつと楽しいと思ったからだ

レナ

「うん、行こう」

俺とレナは4年生の玄関に向かった。ふと隣のレナの顔をみるとレナの顔にはまだ笑顔があった。

興宮高校 4年生玄関前

年が違うということたまに、イヤというほど嫌いになる。私、園崎 魅音は今まさにそう思っていた。

詩音

「はろろくん、お姉〜どうですか？、クラス替え。」

妹の詩音が小うるさくやってきた。今の私にはどのクラスになっても対して意味はない。

魅音

「べつに、私はどのクラスでもいい・・・」

詩音

「そうですね、確かにどんなに願っても、圭ちゃんといっしょのクラスにはなれませんかね」

魅音

「／／／あまり大きな声で、言わないでよ！！／／／」

詩音

「ハイハイ、すみませんでした」

魅音

「ところで、そっちはどうだったの？」

私が聞いたのは、悟史のこと。なんせ、悟史と詩音はたから見れば、恋人同士にしか見えないが、まだ告白はしていない。

詩音

「・・・」

魅音

「あ、だ、大丈夫だよ。詩音圭ちゃんよりは身近にいるんだから、クラスが違っただくらい、どおってことないよ」

詩音

「うゝお姉・・・」

魅音

「ほら、クラスが違っててもがんばっていきな！」

そう、私たちはいつか思いを打ち明ける。どうして、今できないのかは分からない。告白するその日まで、普通に接して、学校を楽しもう。

圭一

「お、いたいた、おーい魅音、詩音！」

レナ

「やっと2人、見つかったよ」

圭ちゃんが、来てくれた、とっても嬉しい・・・そして、いつもい

っしょにいるレナが少しづつやましく思えてきた。

4 / 6 「自己紹介」型

興宮高校 3年A組教室

圭一

「俺の名前は、前原圭一、雛見沢在住、将来の夢は・・・まあ、声優かな。以上！」

圭一君の自己紹介が終わった。何人かは、「声優」と聞いて少し笑っている。

レナ

「（みんな、分かってないなー、圭一君にかかればどんな演技も説得力が出て来るんだから）」

そんなことを考えてるうち、自分の番になった。

レナ

「私の名前は、竜宮礼奈。私のことは『レナ』って呼んでください」
相変わらず、レナは、笑顔いっぱい話している。そのせいで何人かはレナに少し好意をもってしまったっているようだ

圭一

「（そういえば、レナって、好きな人とかいるのかな）」

俺はそのあと、学校でモテる奴の顔を思い浮かべて、レナが惚れそうな奴を探してみた。我に帰ったころにはもう、全員の自己紹介が

終わっていた

興宮高校 1年D組教室

沙都子

「私の名前は、北条沙都子です。みなさん、よろしくお願いしますわ。」

やっと、自己紹介が終わった。こんなことは分校以来だからすごく緊張しますわね。それにしても、クラスに知り合いがないのは、ちよっと心細いですわ。梨花のほうは大丈夫かしら？

興宮高校 1年B組教室

梨花

「僕の名前は、古手梨花。今年から高校生で緊張しているのです。みんな仲良くしてくてくださいなのです。 にぱー」

ふー、終わった。自己紹介なんて何年ぶりかしら。

羽入

「梨花、緊張しましたですか？」

梨花

「（見てわかんない。最後に自己紹介したのは100年前のことよ。十分緊張したわよ）」

羽入

「そういうのも、含めて学校は楽しいのですよ」そんなことは、羽入に言われなくても分かっている。なにもかも新鮮なのは、とても楽しいことだ。そういえば・・・

梨花

「（羽入。あんたは学校来ないの？）」

今、思いだして、羽入は58年の戦いのあと、自由に消えたり実体化できるようになった。学校が楽しいことが分かっているなら、どうしてこないのかと思っていた。

羽入

「・・・」

梨花

「（羽入？）」

羽入は、私の質問には答えず、どこか飛んで行ってしまった。羽入が実体化しないのには、何か理由があるようね

興宮高校 4年C組教室

詩音

「私は、園崎詩音。友達が少ないので、仲良くしてください」

自己紹介では、ああ言ったけどやっぱり、悟史君がいないと、最高

には楽しめない。

詩音

「（悟史君、変な女にたぶらかされてなければいいけど）」

興宮高校 4年A組教室

生徒

「私の名前は××××、よ、よろしくお願いします。」

今は、みんなの自己紹介中、みんなそれぞれに自分の事を話している。ただ、共通することは多大に緊張するところ。そろそろ魅音の番だ

魅音

「わ、私の名前は、園崎魅音。雛見沢に住んでいます。まあ、よろしくね」

魅音の自己紹介、すごい分かりやすく、緊張してたな。まあ、僕も、人のこと言えないけど

悟史

「ぼ、僕の名前は、北条悟史です！よろしくお願いします」

悟史の自己紹介は、クラスの誰よりも固かった、悟史らしいと言えば悟史らしい、でもそんな初々しいところが、逆にクラスの女子の人気を高めている

魅音

「（詩音、あんだ、悟史と同じクラスになれなかったこと、後悔するかもね）」

4 / 8 「部活」型（前書き）

興宮高校

出席状況

（○、出席・、出席しているが体調不良・×、欠席）

圭一 ○ レナ ○

魅音 ○ 沙都子

梨花 ○ 詩音 ○

悟史 ○ 羽入（実体なし）

4 / 8 「部活」型

興宮高校 3年A組教室

学校は、いつ来ても限りなくなる時を感じる。たぶん公立高校というのは分校よりも人が多く、規律が厳しいからだ。まあ、そんな学校も放課後はみんな自由に過ごすことができ俺はこの時間が一番好きだ。理由は明白である。

レ

「圭一君、まだ部活に行かないの？」

圭

「ああ、悪いレナ、もう少し待ってくれ。」

レナがあまりに上の空だった俺をよびにきた。そう、俺の楽しみの一つは部活だ。この高校にもなって、まだ分校から続けているのは俺達らしいといえば俺達らしい。

レ

「圭一君、早く行こ。」

圭

「おう、お待たせ。」

興宮高校 1年生廊下

梨

「うん・・・」

私は今、部活に向かっている。たぶん人から見ればすごく難しい顔で歩いていると思う。何故、そんな顔をしているかといえば、

梨

「（羽入、どうして実体化して学校に来ようとしなのかしら・・・）」

2日前、いやもつと前から疑問に思っていたこと、直接本人に聞いてもいつもどこかに行ってしまう。自分で考えてみてもイマイチ分からない。見た目的には私より年齢は一つ上、実体のあるたのしさは十分分かつているはず。なのに何故？

沙

「梨花」

後ろから、背中を誰かに押された。ふり向かなくても声で沙都子だということには分かった。

梨

「沙都子。どうかしたのですか？」

沙

「それを聞きたいのはこっちですわ。難しい顔してどうしたんですの？」

どうやら、さっきから沙都子には一応呼ばれていたようだ。背中を押されるまでまったくわからなかった。

梨

「み〜、とくになんでもないのです。」

沙

「なら、いいんですけど。さあ！さっさと部活に行きますすわよ。梨花。」

沙都子は、私を追い越し部活に向かおうとしていた。・・・？何か沙都子に変な物がある

梨

「沙都子、その足。」

沙都子の膝に軽く青いものがあつた。

沙

「ん、あーこれは、ちょっと階段で転びまして・・・」

梨

「気をつけるですよ。」

沙

「ありがとございますわ。さ！早く行きますわよ」

たぶん沙都子は何か隠し事をしている。勝手な推測であるが事故ではないようなきがした。

梨

「沙都子待つのです。早く行きすぎなのです」

沙都子のことにも気になるがその前に、羽入だ。

梨

「（近いうちに真剣に問いただす必要があるわね）」

と私は思った。

興宮高校 理科室（部活会場）

この部活は、基本的に生徒会とかに通しているわけじゃないから、同好会としても成立していない。だから、部室はもちろん部費も貰えない。まあ、今までがそうだったからとくに不便ではない。

魅

「はあ、疲れたね」

詩

「お姉。部活前にそんなこと言ったら、気がめいますよ。」

魅

「詩音、そんなこと言ってたてさ。みんな中々来ないんだよ。」

詩

「まあまあ、みんなそれぞれ予定もありますよ」

魅

「それは、分かってるけど。」

部活を早く始めたいという気持ちはもちろんあったが、私にはも

う一つ気掛かりなことがあった

詩

「うーん。もしかしたら圭ちゃん、女の子に呼ばれてたりするかも」

魅

「詩音！そういうこと言わないで！」

詩

「おや？どうして言っちゃいけないんですか。それとも、レナさんって言ったほうが良かったですか？」

魅

「それも、ダメー！／／」

詩

「はいはい。すみませんでした。」

まったく、詩音は容赦なく人の弱みで遊んでくるから嫌いだ。
ガラガラガラガラ

誰が入ってきた。

圭

「おーす。あれ？2人だけか？」

詩

「ええ、圭ちゃん。みなさんなかなか来なくて。」

魅

「圭ちゃんだけ？」

圭

「いや、レナがいつしよだ。それはそうと、魅音、お前軽く顔赤くないか。」

魅

「へ！？、嘘！？、き、気のせいじゃないの。圭ちゃん」

圭

「そうか？（何をそんなに慌ててるんだ？）」

あぶないあぶない。詩音にからかわれたせいでまだ顔が赤くなつてたみたい。

魅

「ところで、レナは？」

圭

「ん、あれ？さっきまでいつしよにいたんだけど。ちょっとその辺見てくる。」

魅

「私も行くよ。」

詩

「いつてらっしゃーい」

私と圭ちゃんは、理科室を出てレナを探しに行った。今日は部活で

きないかも。

興宮高校 廊下（レナ搜索中）

さっきまですぐそばにいたはずだったのにこんな短時間で視界から消えることもあるのかと俺は今初めて思った。

魅

「で、どこまでいっしょにいたか覚えてないの？」

圭

「いや、さっきいっしょに来てるときにあそこのトイレにレナが入って

「圭一君、すぐ行くから先に行つてて」って言つてたからすぐくるとは思つてたんだけどな。とりあえずトイレの中見て来てくれよ。」

魅

「分かった。」

魅音は、さすがにトイレは探すところが少なすぎて1分としないうちに出てきた。

魅

「いなかったよ」

圭

「それは言わなくても魅音の様子見れば分かる。それにしてもどこ

行っただ、レナの奴。次は2手に別れて捜してみるか、魅音」

魅

「！」

俺がそう提案すると急に魅音が何か閃いたような顔になった。

魅

「そうだ、圭ちゃん！面白いこと考えた。」

圭

「面白いこと？なんだ。」

魅

「今から、私と圭ちゃんでミニ部活ってことで

「レナ捜しゲーム」しない？」

圭

「面白そうだな！よしのつた！」

魅

「ルールは簡単、先にレナを見つけたほうが勝ち。罰ゲームは勝者が敗者に1個命令。」

圭

「よし！分かった。」

魅

「それじゃ、よいいスタート！」

俺は魅音のスタートと同時に魅音と反対方向に走っていった。相変わらず、こんなことまでゲームにしてしまうのが魅音のすごいところだ。

興宮高校 保健室

レ

「タオルの水、かえてきたよ。梨花ちゃん」

梨

「レナ、有難うなのです。」

レ

「どう？沙都子ちゃんの様子」

梨

「みく、だいぶ顔色が良くなってきたのです。もう少し寝ていればきっと大丈夫なのです。」

レ

「そう、良かった」

梨

「レナは大丈夫なのですか？圭一に何も言っていないのに」

レ

「きっと大丈夫だよ。それより、沙都子ちゃんいたいどうしちゃったんだろう？」

梨

「さあ、僕にも分からないのです。」

それはほんの10分ほど前のこと。私がトイレから出てきたらちゅうど沙都子ちゃんと梨花ちゃんが部活に向かっていたのでいっしょに行こうと誘ったのだがそのとき急に沙都子ちゃんが倒れた。そのあと梨花ちゃんと協力して沙都子ちゃんを保健室に連れてきた。

？

「あら？古手さんに竜宮さん、どうかしましたか？」

梨

「弥生先生、実は沙都・・・いえ、北条さんが・・・」

今入ってきたのは、保健室の先生、看護 弥生先生。生徒にはとても優しく接してくれる、世話好きな先生。

弥

「なるほど、分かりました。そういうことでしたら、北条さんが元気になるまでいていいですよ。」

梨

「レナ、先生も来たのですから、レナは一旦捜してる圭一たちに知らせてくるといいのです。」

レ

「分かった。ありがとう梨花ちゃん」

私は保健室からでて、部活会場に向かった。

レ

「（圭一君たち、心配してるかな）」

興宮高校 廊下 （圭一、レナ搜索中）

今俺と魅音がやっているゲームは、かくれんぼにっているが向こうは自分が搜されていることに気付いてないので、かくれんぼよりは難易度が落ちる。

圭

「この部活に勝って、魅音に一つ命令してやるぜ。」

とは言っただものの、相手は隠れていないはずなのに見つからない。俺は一旦廊下の真ん中で止まりどこを捜せばいいか考えることにした。

圭

「うーん・・・」

1分考えてみた。

圭

「そうだ！」

俺はある一つのレナの性格を考えて自分なりにレナの行動を推測してみた

圭

「レナは、とても仲間思いで世話好きな奴、だとすればどんな用事があるうと1回は部室に顔を出すはず。」

という分けて、俺の推測でレナのいる場所は部室（理科室）周辺。
興宮高校 廊下

レ

「圭一君、私が急にいなくなって心配してるかな。（してくれたら嬉しいな）」

私は、みんなに沙都子ちゃんのことを伝えるために部室に向かって
いる。・・・変なことを考えていたら、すぐについてしまった。

ガラガラ

詩

「あれ、レナさん。ずいぶん遅かったじゃないですか。」

悟

「レナ一人？圭一と魅音に会わなかった？」

部室に入ると、詩ちゃんと悟史君が2人で暇つぶしにトランプで部
活をしていた。私は圭一君がいないことを確認して、無言で部屋を
出た。なぜなら

レ

「（ちょっと邪魔しちゃったかな）」

詩

「？」

悟

「？レナ、どうしたんだろ？」

私はこれから、どうするか考えてみた。・・・すると向こうから走ってくる人を見つけ・・・

レ

「圭一君」

走ってきたのは圭一君だった、すると急に少し距離をとって立ち止まった。

圭

「レナ、見つけた！」

いきなり、何故か叫ばれた。すると今度は後ろからも声がした

魅

「レナ、みーつけ」

私は走ってきた2人に挟み打ち状態になってしまった。

レ

「え！？え、なに！？」

圭

「レナ、そこを動くなよ！」

圭一君が私に向かって走ってきた、それと同時に

魅

「あ！圭ちゃんずるい。」

魅ちゃんも私に向かって走ってきた！もう、私にはなにがなんだか分からなくなってきた！！

圭

「そんなことがあったのか。早く言ってくれよ。レナ」

レ

「ごめんなさい、圭一君。でも沙都子ちゃんすごく心配だったし」

魅

「まあ、いいじゃん、圭ちゃん。こうやっていなくなった理由も話してくれたんだからさ。」

圭

「まあ、別にいなくなったことは怒ってるつもりはないんだけどさ」

圭一君はあやまってくれればしっかり許す人だ。熱くなるときもあるけど優しさもしっかり持っている

レ

「ありがとう圭一君。あと、さっきのはびっくりしたよ。まさか、魅ちゃんと部活してたなんて。」

圭

「ああ、悪かったなびっくりさせちまって。あ、そうだ魅音、さっきの勝負のことだけだな・・・」

魅

「ああ、あれ引き分けね。」

圭

「やっぱりそうか、しょうがない、次はまけないからな！魅音。」

魅

「返り討ちにしてやるよ。」

さっきの部活のはなし、ほかにも他愛のない話をしながら私たちは保健室に向かっていた。

興宮高校 保健室

ガラガラ

弥

「はい、あら？竜宮さんおかえりなさい、こんにちは、園崎さん、前原君。」

圭・魅

「こんにちは、弥生先生」

レ

「先生、沙都子ちゃんの様子どうですか？」

弥

「まだ目が覚めてないけど、もう大丈夫よ。」

魅

「良かったね、レナ。」

弥

「でも、今日はすぐにでも家で安静にしてたほうがいいわね。」

レ

「そうですか。分かりました。沙都子ちゃん見てもいいですか？」

弥

「ええ、いいわよ。ただし騒がしくないようにね」

レ

「はい」

私達は先生の後ろのカーテンを開け、ベッドに寝ている沙都子ちゃんの様子を見た。ベッドの横の椅子には梨花ちゃんが心配そうな顔で座っていた。

梨

「あ、レナ、圭一と魅音も来てくれたのですか。有難うなのです。」

圭

「いって、沙都子はどうだ？」

梨

「もう少ししたら、目を覚ますと思うのです。」

魅

「それにしても、どうしたんだろうね？、まだ入学したばっかな

のに」

レ

「梨花ちゃんにも分からないらしいの。」

すると梨花ちゃんが急に当たりを見回し始めた。

レ

「どうしたの？梨花ちゃん」

梨

「悟史と詩はいないのですか？」

あれ、悟史君と詩ちゃん、あれ？

圭

「そういえば・・・レナ、部室に行ったときに伝えたよな」

あれ？確かあの時・・・あ

レ

「ごめん、圭一君伝えてない」

あの時は圭一君のこと考えてたから、言いそびれたんだ。

圭

「いや、謝るんなら、俺じゃなくって梨花ちゃんにしてくれ。」

魅

「しかし、めずらしいね。レナが伝え事忘れるなんて」

レ

「う、うん／＼ちょっとね・・・」

今、今日で自分が一番恥ずかしいって思ったー／＼

くその頃く

悟

「また、負けた・・・」

詩

「これで、私の10連勝!」

詩

「悟詞君、神経衰弱、弱すぎですよ。」

悟

「むう・・・」

詩

「（悟史君、かわいい。）」

くこんな、感じでしたく

4 / 1 6 「オヤシ口様」型

興宮高校 3年A組教室

レ「圭一君。おはよう」

圭「よっ・・・おはよう、レナ」

レナの朝からのテンションにこたえるのが俺の毎日の務めだが今日だけはついていけなかった。

レ「どうしたの、圭一君！？元気ないよ」

レナは心配と驚き、両方の感情で俺に聞いてきた

圭「ああ、実は昨日、部活がなかっただろ。そのあと・・・（詳しくはTIPS『おはぎ殺し編』参照）親が「え？あのおはぎかなり賞味期限きれてただけだ」なんて言っつて案の定腹痛をおこした。」

レ「そ、それは大変だったね」

レナはそのあと、授業が始まってからも心配そうな顔を俺に向けてくれていたがさすがに、限界だ・・・

圭「先生、気分が悪いので保健室に行かせてください・・・」

先「ん？そうか。大丈夫か前原？」

圭「だ、大丈夫です。（じゃないかも・・・）失礼します・・・」

俺は教室をでて保健室に向かったが、自分で着かない気がしてきた。

興宮高校 廊下

羽「梨花、大丈夫なですか？急にトイレに行きたくなるなんて、何か変な物でも食べたのですか？あうあう」

うるさい・・・私は今、授業をサボり中、正確には先生に「気分が悪いのでトイレに行かせてください」と言っているがそれは嘘。本当は羽入の実体化しようとしないう理由をゆっくり聞くため。

梨「大丈夫よ。羽入。」

個室に入るまでは仮病だということを悟られないようにつけこたえる。

梨「ん？」

羽「どうしたのですか？」

向こうに人が見える。授業中に廊下を歩く人は珍しいけど、あれ？

梨「あれって、圭じゃない」

羽「本当なのです」

私はすぐに圭一のところに早歩きで向かった。ちなみに圭一は腹を抱えながら、誰でも分かる気分の悪そうな顔で歩いていた。

梨「圭一」

圭「ん・・・梨花ちゃん、ごめん今、すごく体調が・・・」

梨「みく、見れば分かるのです。」

圭「ああそうか。・・・すまない、じゃあな梨花ちゃん」

そう言うときまた、腹を抱えて圭一は歩き始めた。

羽「（あう、梨花も保健室に行ったほうが・・・）」

梨「大丈夫よ。早くトイレいくわよ」

まったく、このうるさいのは！これで村が崇めるオヤシロ様なのが不思議。

興宮高校 4年A組教室

？「悟史君。この問題が分からないんだけど」

悟「えっと、これは、この式をXに代入すれば・・・」

？「あー、分かった分かった。ありがとう悟史君」

数学の時間、いや、私が見る限りほぼ全部の時間、悟史は隣の子に勉強を教えている。（すべて隣から聞いてくる）だが私には分かる、あの教えてもらっている子悟史に聞いた問題全部聞く前から分かっている。なのに何故悟史に問題を聞くのかはを一目瞭然。

魅「（あの子、相当悟史に惚れてるな）」

ポイント稼ぎなのかまでは分からないがとりあえず、好かれようとしているのは分かる。

魅「（それにしても悟史は何か不思議に思わないのかな）」

斜め後ろから悟史を見てて思うこと。

とにもかくにも、一番心配しなくちゃいけないのは詩音のほう。

魅「（詩音。ぐずぐずしてると、知らないうちに悟史取られちゃうよ）」

先「それじゃ、この問題を・・・園崎、答えてみる」

魅「へ！？あ・あのゝすみません、わかりません。・・・」

先「分かった、しっかり出来るようにしておくんだぞ。」

失敗した。いつのまにか悟史とか考えてるうちに黒板の問題に入っちゃった。

先「そうだな・・・」

？「ハイ先生、私できます」

先「ん、よしやってみろ、香坂」

？「ハイ。え」と・・・それでこうなって、答えはY₁₁3です」

先「おー、正解だ。よし座っていいぞ」

？「悟史君のおかげで答えれたよ」

悟「ちがつよ、瑞穂が一生懸命頑張ったからだと思うけど」

魅「（こりゃー本当に詩音に報告して・・・）」

先「これを、もう一度園崎」

魅「えと・・・分かりません」

興宮高校 女子トイレ

ボタン ガチャ

ようやくトイレの個室に入ることになった。

羽「梨花、大丈夫なですか？」

梨「羽入。心配させて悪いけどお腹が痛いのは嘘よ。」

羽「え？・・・」

回りくどいことはやめにした。率直に羽入と話をしようと思っ
た。

羽「嘘？・・・なんで、そんな嘘ついたのですか！？」

梨「あなたと、話をするためよ。誰にも邪魔されずに。」

羽「なんの話なのですか？」

梨「単刀直入に聞くわ。羽入、あなた高校生活をおくろうとは思わ
ないの？」

羽「・・・・・・・・・・」

羽入は黙りこくってしまったが私は話を続けた。

梨「あなたは、もう自由に実体化することが出来るようになってい
る。そのおかげで体が成長するようになった。学校の楽しさも分校
のときに十分味わっているはず。だから、私は聞きたい、あなたが
高校に来ない理由を」

羽「・・・・・・・・・・」

それから羽入はしばらく下を向き何かをずっと考えている感じだった

レ「失礼します。」

弥「あら、竜宮さん。前原君なら今、寝てますよ。」

いきなりの発言に私はちよつとびつくりした

レ「な！？なんで、圭一君を見に来たつて分かるんですか！？」

弥「大体分かりますよ。あなたたち仲いいですし、竜宮さんは仲間
思いの優しい人ですから」

／／／そこまで言われるとちよつと恥ずかしいかな／／／

レ「と、ところで大丈夫なんですか？圭一君。」

弥「ええ、多分・・・」

？不思議に感じた。弥生先生から多分なんて言葉がでるとは思わな
かった。だっていつもは曖昧な返答は絶対にしない人だから。

レ「多分で、どういうことですか？」

私は少し心配になってきた。

弥「あ、ごめんなさい。心配させるような言い方しちゃって。前原
君から体調不良の理由を聞いたんだけど、賞味期限の切れたおはぎ
を食べて絶対に腹痛がおきるわけじゃないから。」

レ「そ、そうですね」

たしかに「賞味期限切れのおはぎを食べた」だけで、お腹が痛くなるとは思えない。・・・って今はそんなことはどうでもいい

レ「それじゃ、そろそろ失礼します。」

弥「あら？もういいの。」

レ「はい。圭一君が大丈夫って聞いてホッと思いました。失礼します」

弥「あ、竜宮さん。ちょっと待って」

レ「はい？」

弥「ちょっと話があるの」

興宮高校 女子トイレ

羽「・・・・・・・・」

私が羽入に質問してから、いったい何分たっただろう。たぶん20分はたっていると思う。その間、羽入は何か言うわけでもなく、かといって逃げようともせず、ただただその場に立っていた。

梨「何も言わないで終わらせないで。貴女の正直な考えを教えてほしいの！何？学校に通うのがいやなの！？」

私が少し力をこめて言うと、やっと羽入は重い口を開いた。

羽「いやなはずないのです！学校と部活はいつ何回行っても楽しいものだったのです！」

梨「学校が楽しいことが分かってるなら、どうして高校通わないのよ！？」

羽「だって・・・僕には、この頭の角があるのですよ！」

梨「・・・」

軽く私のほうが言葉を失ってしまった。そうだ理由はすぐに分かることだった。羽入はその昔、頭の角とよそ者という理由で村から化け物扱いされていた。

羽「分校のときはみんな普通に接してくれました。・・・でも、こんなにたくさんの方がいる高校が僕を受け入れてくれるわけないのです。・・・」

確かそう思いたくもなる。でも・・・

梨「本当にそれでいいの？」

羽「え？」

梨「さつき貴女は受け入れてくれないって言ったけどどうしてそう言い切れるの？」

羽「それは、この角・・・」

梨「角があるから、受け入れてくれないなんて誰かが決めたの！？」

羽「そ、それは・・・」

梨「羽入・・・最初っからダメなんて決めつけてたら、散々負けてきたときと一緒になるわ。それでもいいの？」

羽「それは、絶対イヤなのです。分かったのです梨花。僕も現実を恐れず挑戦してみるのです。高校で、自分の望む生活をつくってみるのです。」

梨「ありがとう。羽入。そう言ってくれて・・・」

羽「僕もきつと、梨花が言ってくれなかったらこのままだったのです。」

梨「学校への手続きとかは私が村長に頼んでおくわ。」

羽「ありがとうございます。梨花」

梨「ただし、羽入。貴女は2年生からよ。」

羽「え？」

梨「たまには一人で、悩んだり、部活メンバー以外の友達を作ることもしたほうがいいわ」

羽「分かったのです。やってみるのです。」

キーン・カーン・コーン

梨「さ、次の授業が始まるわ。早く行くわよ。」

私は速足で教室に向かった。羽入の問題は解決した。これで、高校がさらに楽しくなる。

梨「（今度、シュークリームでも買ってあげよう）」

これで部活メンバーは8人になった。

興宮高校 保健室

レ「え？」

弥「驚くのも、無理ないわね。あ、でも安心してただの噂だから。」

レ「そうですね」

弥「だから、気にしないでね。」

レ「分かってます。・・・失礼します。」

ガチャ

私は少し、強く扉を閉めて保健室をでた。絶対に信じたくない噂だったから・・・

弥「くっくっくっくっくっくっ」

5 / 3 「園崎家」型（前書き）

ゴールデン・ウィーク

学校 休み

5 / 3 「園崎家」型

園崎家 本家

今日1日の貴重な休みの予定は、来客してきた詩音の何気ない一言ですべて決まってしまった・・・

詩「ところでお姉、最近、圭ちゃんとはどうなんですか？」

魅「へ！？い、いや、あの・・・その・・・」

詩「はあ、まったく進展してないんですね。」

魅「・・・うん・・・」

詩音は予想していたような感じで私の弱い返事に答えた。

詩「いいですか。お姉。そんなことじゃなにも言えないまま高校生活終わっちゃいますよ！ただえさえレナさんという強敵がいるんですから」

魅「そんなことは分かってるよ。でも、どうすればいいか・・・」

詩「いいですかお姉。まずゴールデン・ウィークに家にいるのがそもその間違いです。こういうときは、圭ちゃん誘って二人で遊びにゴーです！」

魅「沙都子とか梨花ちゃんも誘って」

バチッ

詩「お姉〜、つまらない冗談言ってる場合じゃないですよ〜」

詩音の右手にスタンガンが装備されていた。

詩「分かったら、さっさと圭ちゃんのところ行きなさい!」

魅「は、はいー!」

詩「結果教えてくださいねー」

詩音にまかり通されてしまった。悟史のこととか聞いたり、私のクラスの悟史好きの話聞かせようと思ったのに。しょうがない別に詩音に言われなくても少しやばさは感じていた。

魅「よし!がんばれ私。圭ちゃんの家へ。」

あ、でもその前に興宮に行ってこの地味な服をどうにかしないと。

古手神社 倉庫

梨「ケホッ。」

羽「梨花、何もせつかくの休みの日に倉庫の掃除なんてしないでいいのです」

梨「休みだから、やってるのよ。つべこべ言っただけであなとも手

伝いなさい！」

羽「あうあう、分かったのです」

羽入は無造作に倉庫の中を叩きはじめた。

梨「ところで羽入。あなた学校に行く準備はできてるの？」

羽「え？手続きとかは梨花が・・・」

梨「ああ、そういうことじゃなくて、心の準備よ。再来週の月曜日から入学だから」

羽「一応できていますです。」

梨「そう。ならいいわ。」

この様子ならたぶん大丈夫だろう。なにせ私は今始めて羽入が学校に行く日にちを話したのだから。

パキ

？なにか変な音が・・・

梨「羽入なにか壊したんじゃないでしょうね！？」

羽「あうあう、こ、壊したわけじゃないのです。この大きな箱を開けただけなのです。なんなのですか、この箱？」

梨「知らないけど、なんだか・・・」

羽「なんなのですか？」

梨「いえ、何にも。（フワラズの勾玉の入っていた箱に似た感じがする。）」

それにしても、不思議な箱だ。外側は全部銀色のメッキで塗られており、なかは長方形型の窪みが数個あるだけだからっぽである。

梨「羽入。その箱、一応家に持っていくわよ。」

羽「何か分かったのですか？僕はなんだかイヤな気がするのです。」

梨「分からないわ。」

私も羽入も箱から発せられている、イヤな気を感じていた。それに、さつき音がしたとき少し世界が歪んだ気がした。なにもおこらなけ
はいいいんだけど

興宮 町内

詩音が勝手に決めてしまったこととはいえ、何かしら報告しないと怒られそうだった。ちなみに、今の時間は午前10時半。時間があ
りそうであつという間に終わってしまう。つまり私は・・・走って
いた！！

魅「ハア・・・ハア・・・服屋は、えっと・・・その角を右！」

私は、もう、周りの景色がほとんど分からなくらい全力疾走で走っていた。するとある公衆電話の中に見覚えのある人が一瞬見えた。

魅「（今は、確か悟史の隣の席の香坂 瑞穂！詩音！私のこと気にしてる場合じゃないよ）」

唯一、走っている途中に考えたことだった。そんなこんなで園崎家経営の服屋さんに着いた。

魅「ハア・・・ハア。」

カラン

魅「すみません。」

私が店に入ってそう言つと、待ち侘びたように店員さんが答えた。

店員「やつときた魅音ちゃん。！さあ、こつち来てこの服を着て！」

私は何がなんだか分からなくなった。

魅「え？どういうことですか？」

店員「詩音ちゃんから電話があつたんだよ。魅音ちゃんが今日デートだつていうから、服選んで待ってたんだよ」

魅「／／／」

もう私は恥ずかしくて、なんにも聞こえなくなっていました。きっと私の顔はあかね色に染まっていたと思う。

そんな私をよそに店員さんは黙々と私の服を変えていた。

店員「さあ、できた。行つてらっしゃい。」

店をでてからまた全力疾走で雛見沢に戻った。帰り道の行きにも見た公衆電話の中にはまだ瑞穂が電話していた。ちなみに店に着いて思ったことが一つ。

魅「私、何で自転車で来なかったんだろう？」

（公衆電話）

瑞「・・・はい・・・はい。それは十分、分かっています。・・・はい、問題はありません。ごく自然に接触は行っております。・・・分かりました。では引き続き、コンタクトをとってみます。・・・え・・・いえ、私は、騙しとか、暗殺とかは、あの人みたいなおことは出来ませんので。・・・はい・・・では、失礼します。」

雛見沢

やっと雛見沢に帰つてこれた。（走つて・・・）とにかく、最終的には今日の終わりに詩音に報告しなければいけないのでさっさと圭ちゃんの家に行きたいのだから、

魅「なんて、口実で行けばいいのか・・・」

つまりそういう分けて、圭ちゃんの家とは目と鼻の先なのだがそこ（毎朝、レナが待っている場所）で悶々としていた・・・あ。

魅「（なんだ、ただ遊びにきたって言えばいいんだ・・・なんで、思い付かなかったんだろ）」

今日の私は、行動の一つ一つがすごく損している気がする。たぶんいきなり詩音に言われて混乱したからだと思う。

という分けて、圭ちゃんの家チャイムを押すことに・・・押すことに・・・押す・・・

魅「（なんで？どうして、たかが呼び鈴をならすのに、こんなに緊張するの！？。レナといっしょならなんてことないのに）」

その緊張の答えが出ないまま、2分ほどかかってやっと呼び鈴をならせた

ピンポン

圭「はい。ん？魅音か。」

魅「や、やあ、圭ちゃん。」

圭「何か、用か？」

気のせいかな、圭ちゃんのテンションがいつもより低い気がする。

魅「いやー、あのーほら、せっかくのゴールデンウィークなのに、
退屈だからさ少し遊ぼうかな」と。

圭「悪い、魅音。今日は帰ってくれ。」

ボタン

魅「！？（え？何？なんで？）」

その瞬間私の頭の中は一気に混乱状態になった。

ガチャ

私は、無理矢理圭ちゃんの家玄関をあけた

魅「ちょっと、圭ちゃん。それはちょっと一方的すぎるんじゃない
！？」

すると、圭ちゃんが力無く答えた。

圭「悪い。今日ちょっと風邪ひいちゃってな。だから遊べないんだ
よ」

魅「あー、そうだったの。ごめん・・・」

そう答えて圭ちゃんの家をでた。

詩「それで、のこのこ引き下がってきたんですか！？」

今、公衆電話で現在状況の説明と相談の電話を詩音にしている。

魅「しょうがないじゃん風邪だっていうんだから」

詩音に一言嘆くと、呆れたように答えた。

詩「お姉、好きな人が病気なら付きっきりで看病とかしたくなるものじゃないですか？」

魅「つ、付きっきり／＼／」

詩「とにかく、それで結果だしてから帰ってきてください。」
ガチャ

魅「あ、ちょ、ちよつと、詩音！」

切れちゃった。

魅「（圭ちゃんの看病か／＼／）」

私はゆっくり歩き始めた。

前原家

魅「圭ちゃん、おしほりかえてきたよ。」

圭「ありがとう、魅音・・・」

魅「どういたしまして。あ、私お粥でも作るよ。」

圭「いや、いいよ。そこまでしてもらわなくても、頼んだわけでもないのに、悪いぜ。」

魅「いいんだよ。大事な仲間が風邪だつていうんなら、遊んでなんかられないし。じゃお粥つくってくるよ。」

私は圭ちゃんの部屋をでて、台所に入った。

魅「（はあゝ！すごく緊張した、圭ちゃんと二人つきりだけで緊張するのに看病だなんて）」

魅「しっかりしろ、私。さあ圭ちゃんのためにお粥つくってあげないと。」

冷蔵庫の中にあるものと、習ってきた知識を活かして腕を振るって作るう。

興宮図書館

悟「オーイ。レナ。」

レ「あ、悟史君。こっちこっち」

何故、レナが図書館ににいるというと、あることを悟史君に相談するためだった。

レ「ごめんね。悟史君バイトで忙しいのに。」

悟「いいいいいよ。まだ沙都子の誕生日までに時間あるし。」

悟史君は、帰ってきてから毎年沙都子ちゃんの誕生日にプレゼントをおくっている。でも・・・

レ「悟史君。沙都子ちゃんにプレゼントするのは偉いと思うけど、自分のことに使おうと思ったことないの？」

悟「え？うん・・・ないかな。でもなんで？」

レ「いや、悟史君もうすぐ卒業だよ。自分の進路のためにお金とか貯めておくとかはしないの」

悟「・・・そういえば、卒業すっかり忘れてたよ。でも心配しないで僕にもいろいろ考えがあるんだ。」

レ「それならいいよ。もうこれ以上何も言わない。でも困ったときは言ってね。」

悟「ありがとう。レナ。ところでレナの相談って？」

レ「あ、ごめん。今から言うね。実は最近、保健室の弥生先生から聞いた話しなだけど・・・」

10分くらいレナが話したあと、悟史君が少し重そうな口を開いた。

悟「そんな噂が流れてるの・・・信じないよ僕。」

レ「もちろん、レナも信じてない。だから、相談したの。」

悟「でも、それって直接本人に聞いたほうがいいんじゃない。」

レ「なかなか、会えないんだよ。最近。学校では言いづらいし。」

悟「うん。どうしよう。」

レ「しばらく様子を見てみよう。いつか真実が分かるはずだから。」

悟「分かった。」

それだけ言い残し、私は悟史君と別れた。悟史君が信じないように私も絶対信じない。

レ「（噂が嘘であることを、信じるよ。魅ちゃん。）」「

魅「どう。圭ちゃん。」

圭「美味い！やっぱり魅音はすごいな。」

魅「いや、そんな／＼／」

圭ちゃんは、私のお粥を喜んで全部食べてくれた。何より嬉しいこと。

その後は、圭ちゃんは寝たきりだったが少し他愛のない話をして盛り上がった。少し控えめに。

ふと、外を見ると少し空が茜色になってきていた。

圭「魅音。そろそろ帰らなくて大丈夫なのか？」

魅「え？」

少し、悩んだけどこれ以上圭ちゃんの家にもなにも変わらないだろうし（圭ちゃんの側にはいたいけど）今日はもう帰ることにしよう

魅「あつ、じゃあ夕飯だけつくって帰るから。」

圭「いや、べつに帰ってほしい分けじゃないんだぜ。」

魅「いやいいの。圭ちゃんに迷惑かけるし。じゃあ夕飯つくってくる。」

私は、うどんをつくって、圭ちゃんのところを持っていくことにした。でも、足は動いていたが心の中では持つて行きたくなかったのかも知れない。

魅「（これを、圭ちゃんに届ければ、たった1日だけだったけど幸せな時間が終わってしまう。）」「

階段を上がり、圭ちゃんの部屋の前まできた。ふすまを開けようとしたとき、圭ちゃんの声が聞こえてきた

魅「（独り言？）」「

私はその、独り言をふすまごしにちょっと聞くことにした。

圭「しかし、今日は魅音に世話になってばかりだったな。それにしても、魅音の奴せつかくの休日、俺なんかのために使わせちまって、本当、魅音には何もしてやれないな、俺。魅音かわいいのに、彼氏に困ったら検討してやろうかな。」

魅「圭ちゃん・・・／＼／」

私はそのあと、少し間をおいて、圭ちゃんの部屋に入りさつさと帰ることにした。帰り際に圭ちゃんが見送ってくれた

圭「またな。魅音。」

魅「また。学校でね。圭ちゃん。」

あたりはすっかり暗くなってしまった。私は今日のことを詩音に報告するため、近くにあった公衆電話に入った。

魅「え〜っと、詩音の連絡先・・・ん？」

電話のプッシュボタンを押し終えたときふと下を見ると真っ赤で少し不気味な本が落ちていた。私はそれを手にとってみた。

魅「なんだろう？この本」

ガチャ

魅「あつ、詩音。うん行ってきたよ。・・・まあ、詳しい話しは帰ってからするよ。じゃあね」

ガチャ

私はそのまま、暗い道を一人で帰ることにした。うれしい気持ちで帰っていたせいか、赤い本を手に持っていることを忘れていた。

古手神社　高台

梨「やっぱり、何かあると思った。」

羽「何なのですか？その赤い本」

梨「私もさっきまで分からなかったけど、今分かったわ。この本があつた場所。そして、このタイトル。」

羽「これは・・・そんな」

梨「そう。カケラよ。」

梨「これがあるってことは他にもあるはず、捜さないと。」

羽「早く見つける必要があるのです。もし、みんなが見たらどうなるか、分からないのです。」

梨「ええ。」

高台に落ちていた、赤い本。タイトルは短く3文字。

『暇潰し』

5 / 3 「園崎家」型（後書き）

この二次創作で、始めて後書きを書きます。

とはいえ、ただ見てくれるだけでいいのでとくに書くことはない。
次では書くこと考えておきます

5 / 4 「デジャヴ」型（前書き）

ゴールデンウィーク

学校休み

5 / 4 「デジャヴ」型

前原家

『私、前原圭一は誰かに命を狙われています。何故、誰に命を狙われているのかはわかりません。ただ一つ分かることはオヤシロ様の祟りと関係があるということです。』

パチ

圭「……………朝か……………」

俺は、ゆっくりと布団から体を起こし、背伸びをした。風邪をひいて、あまり動けなかった体もだいぶ良くなった。魅音の看病と美味いお粥のおかげだろう。

圭「しかし、変な夢見たな。妙にリアルな夢だったけど。」
変な夢のことはさておき、今日はなんだか、はやく起きすぎたな。どうしたものか。

北条家

『でも、わたくし強くないといけませんの……………』

沙「・・・夢？」

すごく、現実味のある夢でしたわ。正夢になってもおかしくない夢でしたわね。

悟「沙都子？珍しく早いね。」

沙「あら、わたくしも早く起きるときくらいありますわ。にーにーこそ早いんじゃないやありません？」

時計を見るとまだ、6時ちょっと過ぎ。いくら早起きな、にーにーでも早過ぎる。

悟「ちよつと、夢を見ちゃってね。」

沙「夢？」

悟「うん。昔の夢。さあ、朝ごはんにしよう。沙都子。」

そう、ひと昔忘れてもう頭には残っていないと思っていた。5年前の記憶。

沙「朝ごはん、手伝いますわ。ん？」

電話台の下に、見覚えのない本があった。

沙「何かしら。これ。・・・にーにー、これにーにーのですか。」

悟「え？・・・うーん知らないな、こんな本。ご飯のあとに考えてみよう。」

沙「そうですね。ちなみにタイトルは・・・怖いタイトルですね。」

一旦、本を起きご飯の支度に向かった。赤い本は黒いタイトルで

『皆殺し』

ゴミ山

レ「この場所に来るのは久しぶりだな、しばらく見ないうちに山が増えてる。」

レナは、4年前によくきた場所にいる。高校に入って来れる時間がなくなってしまったので、懐かしく感じる。

レ「・・・あの、夢では確か、このあたりかな。」

久しぶりにこの場所に来たのは変な夢のせい。私が・・・

レ「思い出しちゃだめ！きっと疲れてるんだレナは。噂を考えるようになったから。」

レ「・・・もう、帰ろ。帰って休もう。」

私は足元に注意しながら、帰路についた。私は頑張って頭をふって忘れようとした。でも、今朝見た夢のことは忘れられなかった。

そして不思議なことはもう一つ、山の中にゴミに混じって落ちていた真新しい赤色の本がすごく気になった。

園崎家

詩「だいたいですね。お姉。そこまでいったんならもっと、積極的にですね……」

魅「詩音。私は、私なりに頑張ったんだって！」

私は昨日のことを詩音に報告したのだが、どうにも納得がいかないらしい。勘弁してよ

詩「まあ、いつものお姉にしてみれば良くできましたってところでしょうかね。」

魅「ありがとう。詩音。」

詩「あともう一ついいですか。お姉の横にあるものなんですか？」

魅「え？ああこれ。」

私は昨日公衆電話で見つけた、赤い本を飯台の上に置いた。

魅「実は昨日、詩音に電話したでしょう。そのときの公衆電話の中に置いてあったんだけど電話したら、手に持ってるの忘れて持っ

てきちゃったんだよ。」

詩「電話じゃなくって、嬉しくっての間違いじゃないですか。」

魅「／／／」

詩「まあそれはいいとして。」

魅「いいんと言わないでよ」

詩「なんなんでしょうね。この赤い本？」

詩音はもう私の話しは聞いてないみたいだから私も昨日の話題で反論するのはやめることにした。

魅「タイトルなんて書いてある。」

詩「え？ちょっと貸してください。え〜っと、」

魅「なんて書いてある？」

詩「おにかくし？」

魅「鬼隠し！？本当にそう書いてあるの。ちょっと見せて。」

私は詩音から、本をとってタイトルを見た。

魅「本当だ。でもなんで。」

詩「大方、鷹野さんあたりが趣味でつくったんじゃないですか？」

魅「それにしちゃ、結構な厚みあるよこの本。」

詩「本人に聞けば分かることです。診療所行きましょう。」

魅「分かった。でも、いるかな？ーってちよつと詩音。」

詩音は私の話を聞かないままさっさと行ってしまった。

ゴミ山

羽「梨花〜。こんなところにあるのですか？」

梨「黙って探さない。暇潰しがあの場所にあつたんならここにも何かあるはず。・・・ん？」

梨「羽入！」

私は羽入を呼びつけて、自分のところに来させた。

羽「どうしたのですか。あ！あつたのですね！」

梨「ええ。しかも予想通り。」

羽「予想通り？」

私は本を拾いタイトルを羽入に見せた。

羽「じゃあ・・・他にも？」

梨「ええ。あるかも知れないわね。」

本を自分の懐に入れ、大事に持って歩くことにした。羽入に持たせるといろいろどこるかいきそうなので

羽「これから、どこに向かうのですか？」

梨「そうね。診療所に行くわよ。少なからず何かあるかもしれないから。」

羽「分かったのです。そうと決まれば急ぐのです。」

梨「ちょっと待って羽入」

羽入が飛んでいこうとしていたのを見て、私は引き止めた。

羽「何なのですか？」

梨「羽入。実体化しなさい。もうすぐ、学校行くのにいつまでも飛んでるといざという時困るわよ。」

羽「ごめんなさいなのです。」

そう一言言つとすぐに羽入は実体になった。久しぶりに羽入の私服を見た気がする。

梨「謝らなくてもいいわよ。さあ行くわよ。」

羽「はいなのです。」

私達は、並んで走って診療所に向かった。

羽「でもなんで、あれがゴミ山にあるのですか？」

梨「たぶん最初に落ちた場所だからよ。」

カケラタイトル

『昼壊し』

前原家

母「圭一。良くなったからってだらけないの。診療所で薬貰ってきたさい。」

圭「はいはい。分かったよ。」

俺はだるい体を布団から起こし、着替えて玄関に向かった。薬は結構貰ったのだが、お袋的には足りないようだ。俺の体を気遣ってくれているらしい。

父「母さん。薬は・・・？」

母「今、圭一に取りに行かせますから。待っていてください。」

・・・前言撤回。どのみち、診療所に行かなければ親がキレかねないからさっさと行くことにしよう。

圭「行ってきました。」

北条家

『皆殺し』

家に置いてあった、赤い本のタイトル。

プルルルル……

沙「誰も出てくれませんわね。どうします？」

悟「しょうがないね。じゃあ外に出て直接捜そう。この本のこと聞きたいし。」

沙「ではまず、圭一さんの家から行ってみましょう。」

僕と沙都子は、見知らぬ本を持って外にでた。外に出ると、太陽が高く昇っていた。

入江診療所

ガラガラ

鷹野「あら？魅音ちゃん、詩音ちゃんどうしたの？二人揃って。」

自分が言っていたことは見事に裏切られ、おもいつきり診療所に鷹野さんはいた

魅「実は、鷹野さんに用事で。」

鷹野「私に？珍しいわね。何かしら。」

私と詩音は持ってきた本を鷹野さんに見せた。4年前の記憶が少し前に出すのを邪魔したが。

詩「この本、鷹野さんのですか？」

魅「雛見沢の公衆電話にあったんですけど。」

鷹野「え？うーん。知らないわね。タイトルは興味をそそられるけど。」

魅「ありがとうございます。すみませんでした。」

鷹野「いいのよ。あ、もしかしたら入江先生が知っているかも知れないわ。ちょっと待っててくれる。」

鷹野さんは、奥にいる入江先生を呼びに言った。4年前にあんなことがあったのに今ではすっかり明るくなっている。しばらくして、鷹野さんが入江先生を連れて戻ってきた。

入江「魅音さん。詩音さん。こんにちは。どうかしましたか？」

魅、詩「「こんにちは。入江先生。監督。実は・・・」」

私達は、手早く用件を話し、本を見せた。

入江「うーん。わかりませんね。あ、もしかしたら患者さんの中にいるかもしれません。お二人さん、よかったら預かって聞いてみま
すよ？」

私と詩音は少し相談した後結論をだした。

魅、詩「じゃあ、お願いします。」

私達は本を入江先生に渡して診療所をでることにした

魅、詩「どうも、すみませんでした。」

ガラガラ

雛見沢 道中

詩「これから、どうします？」

魅「そうだね。一旦家に帰って考えよう。」

診療所に本を置いて、雛見沢の田んぼ道を私と詩音は歩いていた。
これからの予定を考えながら。
しばらく歩いていると、前方に人の姿が見えた。見覚えのある人と
分かったのはものの30秒くらいだった。

魅「あれ、おーい梨花ちゃん」

梨「ん？もしかして、魅音と詩音。」

羽入と、診療所に向かっていている途中に魅音と詩音に会うとは好都合だ。私は走って2人に近づいた。

ちなみに羽入は久しぶりに実体化したせいか、少し遅れている

梨「二人とも、こんにちは。珍しいわね。二人で歩いてるなんて。」

魅、詩「「こんにちは。梨花ちゃん（ちゃま）」」

魅「そういうときもあるよ。梨花ちゃんこそどうしたの？走ってたみたいだったけど」

梨「少し、急ぎ用でね。診療所に。」

さつきから、気づいていたこと、二人とも口調が変わっても動じていない。これはすごく嬉しいこと。
そしてやっと羽入の声が聞こえてきた。

羽「梨花。もう少しゆっくり走ってほしいのです。あれ、魅音、詩音こんにちわなのです。」

羽入がそう言って疲れている顔をあげると、二人ともすごく驚いた表情になった。

魅、詩「「羽入^{さん}！？」」

羽「へ？なんなのですか？」

羽入は全く驚かれた意味が分かっていない感じだった。

魅「こんにちはじゃないよ。すごく久しぶり。いつ雛見沢に帰ってきたの？」

詩「4年ぶりですね。懐かしい感じです。羽入さん。」

二人の話を聞いたあと、私の袖を引っ張って小声で話し始めた。

羽「梨花〜。二人は何を言っているのですか？毎日会っているのです。」

私は呆れた感じで答えた。

梨「羽入。あなた少しぬけてるわね。いい、貴方は毎日みんなと会って（見てと言ったほうが正しい）いたかもしれないけど、二人からしてみれば4年ぶりなの。見えなかったんだから。」

羽「あ・・・そうだったのです。」

やっと理解したらしい。私は羽入が高校でやっていけるか心配になってきた。学力的な面で。

魅「どうしたの？梨花ちゃん、羽入？」

梨「な、なんでもないわ。」

魅「ふーん。あ、二人とも診療所行くんだよね。暇潰しに私達もついていっていい？」

羽「もちろん。いいですよ。」

魅「よし。じゃあ行こう！詩音も行くよね。」

詩「はい。私も予定ありませんし」

魅音、詩音も含めて診療所に行くことになった。

本を持って、にーと一緒に圭一さんの家に来てみたのですが

圭母「圭一？ごめんなさい。今薬貰いに診療所行ってるのよ。診療所行けば会えるかもしれないわ。」

悟「ありがとうございます。」

圭母「いいえ。いつもありがとうね。」

沙「失礼しました。おばさま
ボタン。」

私とにーは診療所に向かうことにした。

魅「ところで、二人はなんで、診療所に向かっているの？」

ふと魅音が尋ねてきた。私と羽入はなるべく正直に言うことにした。

梨「しいて、いうなら探し物よ。」

羽「赤い本を探しているのです。」

魅「赤い本？もしかしたら・・・」

詩「お姉の拾ってきたあれじゃないですか？」

梨「二人とも、知っているの！？こういう感じの本。」

私は懷に閉まっていた、『昼壊し』のカケラを取り出し二人に見せた。（ちなみに『暇潰し』は総封庫の中。）

魅「そう。全く同じ感じのだった。あれほかにもあったんだね。」

今日はとてもついていると、私は思った。少し手間取ると思っていたカケラ探しがこの短時間で3つ目。

羽「今、どこにおいてあるのですか？」

詩「実はさっき、持ち主を捜してもらったために、診療所に置いてきたんですよ。」

ならば、早く診療所に行って回収しないといけない。誰かに見られる前に。

そう思いながら歩いていると、前方の横道に2人の人影が見えた。

魅「あれ？あれって。」

詩「あ・・・悟史君！。沙都子！。」

詩音が大声で2人を呼んだ。さすがに気づいたらしく向こうもこっちに気づいた。

悟「あれ？魅音、詩音。それに梨花ちゃん。羽入もいる。」

沙「え？本当ですね。久しぶりですね。」

そう話し終えたあと、2人がこっちに向かってきた。

悟史、沙都子とも会って、歩きながら自分たちの事情を話していた。

沙「じゃあ、この本も梨花のだったのですか？」

沙都子がそう言うつと悟史が後ろから赤い本を取り出した。

梨「それをどこで！？」

悟「家に置いてあったんだよ。電話のところに。ねえ、この本なんなの？」

梨「全部、集まったら話す。一つだけ言えることは、これは外にあったらいけないもの。」

魅「良く分からないね。全部見つけたらわかりやすく教えてね」

確かに今なら全て教えても問題はないはず、たとえば、過去の世界で何が起こっている。

魅「ところで、沙都子と悟史はこれからどうするの？本の持ち主も見つかったし。」

沙「私はみなさんに付き合いますわ。その本が何なのかも知りたいですし。」

悟「うん。僕も付き合うよ。仲間に手助けをしてあげないと。」

沙都子と悟史も、付き合ってくれることになった。やはり、部活メンバー全員には過去を知っておく必要があると思った。

そんなこんなで歩いていると、やっと診療所についた。

詩「やっと、戻ってきましたね。」

魅「話してても、中々着かないもんだね。」

羽「それでは、入るのです。」

羽入がそう言って入ろうとした。そのとき、脇の道から聞き覚えのある声がした。

レ「あれ？みんなそろって、何してるの？」

入江診療所

診療所の入口で会ったレナにも私達の事情を説明した。今度はレナ

の診療所に来た理由を聞くことにした。

梨「何の用で診療所に来たの？」

レ「ちよつと朝から、気分悪くて。」

確かにレナの顔色はいつもより悪そうだった。ここは早く、診療所で見てもらうべきだと思った。

梨「早く、診てもらったほうがいいわよ。」

私達はやっと診療所に入った。正面には鷹野がいた。

鷹野「あら？どうしたの。今度は大人数で」

まず話をするまえにレナの体調のことを話し、レナは診察室に連れていかれた。やっと本題にはいる

魅「あ、鷹野さん。すみませんがさっきの本返してくれませんか。」

魅音が切り出した。

鷹野「本？あれならさっききた前原君が持って行ったけど。」

梨「え？圭一が。」

私は嫌な気がサーッと抜けた。

魅「圭ちゃんが持って行ったのなら、圭ちゃん家に行こう。あれ？梨花ちゃん？」

私は嫌な予感しか、感じていなかったが、まだ救いはある

入江診療所（梨花達到着、20分前）

圭「あの、すみません。前原ですけど、風邪の薬いただけませんか？」

鷹野「あら、前原君。分かったわ。ちょっと、その席で待っていてくれる？」

圭「わかりました。」

俺は診療所の待合室の椅子に腰掛け、少しでも疲れがとれるようにした。なんせ、病み上がりだ。身体がだるくて仕方ない。

圭「ふー。・・・ん？」

グーッと背伸びをしてふと横を見ると、俺の隣にカバーが全部真っ赤に染められている本が置いてあった。俺はそれを手に取って何の本か見ることにした。

圭「なんだこの本？タイトルは・・・『鬼隠し』。なんかの、ホラー小説かな？」

しばらく、その本をくるくる回して眺めていたが

圭「薬くるまで、暇潰しにでもこの本読んでよ。」

俺は、本のなにも書かれていない1ページ目を開き、次に2ページ

目を開いた。見てみると、2ページ目には3行で横書きの詩のようなものが書かれていた。

圭「どうか嘆かないで………え？」

その時、何だか自分の視界がとても遠のいていく感じがした。そして、やっと視界の感覚が戻った。だが、そこで目に映ったのは緑の草木と舗装されていない砂利道の風景。

圭「ここは、雛見沢……だよな？でもなんだか、変な気分がする。

」

周りに映っている景色は雛見沢のものだが、イマイチ違和感がぬけなかった。まるで、本当の世界ではないような感覚。すると、近くに女の子が一人立っていた

圭「ん？あそこにいるのは、もしかして、レナ！？」

レナが立っているような、感じだったが、違和感があった。

圭「レナにしては、少し今より背が低いな。」

そんなことを思っていると、今度は向こうの道から、男の子が走ってきた。

圭「誰だ？あれ。何処かで見たような。」

走って近づいてくるごとに、どんどん顔が見えてきた。その顔が完璧に見えたとき、俺は少し仰天とした。

圭「え？……俺！？」

走ってくるのは、中学時代の俺、前原圭一だった

そこからは黙って見ると自分で言ったが、正直見るに絶えなかった。
大まかに見たことを説明すると、

圭「（車は安全運転してたのにひき逃げだと思い、急にバットを持つて素振りを始めて、レナ達を拒絶しているような感じだ）」

レ「悟史君はね、転校しちゃったの」

レナが、不可解な行動の俺を心配してくれているというときも。

圭「（何で、そんな怯えた顔をしてるんだよ！俺！）」

もう、自分で自分が分からなくなってきた。触ろうとしても触れない、もう何が目の前でおきようと唯見るだけ……目の前でながれている世界の結末を。

グチャ、ベキ、バキ。そんな生々しい音と、ブン、ブンというバットを振るう音だけが部屋に響いていた。

カラン

バットを振る音が止み、過去の俺がバットを手から離れた。

過去圭「・・・ハア・・・ハア・・・」

ものすごく息が荒れている。それもそうだ、なにせ、人を2人、レナと魅音を・・・殴り殺したのだから・・・

過去圭「え？車？白いワゴン車、逃げないと、大石さんに真実を。」

過去の俺は、家から出て暗い道の中を走って行った。だが俺は思った、さつき過去の俺は真実とか言ってたけど、過去の俺に真実なんて話せない。間違っているのは全て自分なのだから、おはぎの中身に入っていたタバスコを針と間違える、取り出したマジックを注射器と間違える。こんな人間が真実なんて語れるわけない。狂っていたのは、誰でもなく、自分。

俺は、すでに動かない、レナと魅音を見た。すると、無意識に涙がこぼれてきた。

圭「（レナ・・・魅音・・・うつくつ・・・）」

そのとき、世界が歪んで意識が遠のく感じがした。

入江診療所（梨花達到着、15分前）

圭「・・・ここは・・・」

気がつくと、入江診療所の椅子に座っていた。

圭「あれは、夢だったのか・・・」

そう思いふと、膝に乗っている赤い本を見てみると

圭「（いや、ちがう！あれは夢じゃない。この本に書いてあることそのままだ！あれは、ここじゃない、別の雛見沢であったことだ！じゃあ・・・俺は・・・）」

それ以上俺はなにも考えず、本を持って診療所から全力疾走で家に戻った。

入江診療所

入江診療所の椅子に座って、私はみんなに大事な話しをすると言った。

梨「みんな、よく聞いて・・・もしかしたら、圭一は最悪の場合、自殺するかもしれない・・・」

レ・魅・沙・詩・悟

「ええ!？」

当然のごとく、5人は驚いている。私の考えていることが理解している羽入も少し慌てている。

羽「あう、あう。そんなはっきり言っているのですか?」

梨「可能性ははっきりと伝えて緊張感をもたせるべきよ。」

すると、慌てた5人が私と羽入に取り乱しながら、質問してきた。

魅「ど！どういふこと！？詳しく教えて！」

「どうしていきなりそんな！」

みんな、それぞれにあわてふためいている。まあ当然の反応。そこに羽入がみんなをなだめに入った。

羽「あう、あう、み、みんな、落ち、落ちつくのです。あうあう。」

梨「あなたが一番落ち着きなさい。みんな、冷静になって。そして、聞いてほしい。圭一に何が起きているのかを。」

私がそう言うと、みんな深呼吸などして冷静さを取り戻してきた。そして、みんなが静まり返ったときに私は再び口を開いた。

梨「今から、話すことは全て作り話でもなければ、冗談でもない。全て私と羽入が体験してきたこと・・・」

圭一の話しに達するには、私の百年の旅の話しをするしかなかった。結局、どこかで話さなくてはならなかったから、好都合だ。でも圭一は好都合でもなんでもない。手を尽くせるなら急がないと。

圭母「あら？圭一おかえり。どうしたのちょっと、顔色悪いわよ。」

圭「……………なんでもない。……寝る。」

その後、階段を上がっていく俺に何か言っていた気がするが、お袋の言ったことは、あまり聞いていなかった。寝ると言ったが、寝るのかどうか定かではない。自分は今どうすればいいかわからなかった。

入江診療所

あれから私はできるだけ、わかりやすく説明をしていた。そして、30分でかなり要約した私と羽入の旅を話し終えた。そしてやっと今の圭一の本題に入る。

梨「圭一が見てしまったのは、「鬼隠し」という世界の話。この世界を簡単に説明すれば圭一が仲間を信じられずに疑心暗鬼に陥りレナと魅音も殺してしまう、悲しい世界。」

レ「……………」

魅「……………」

レナと魅音は、何も言わずに唯聞いていた。ほかのみんなも何か言う気配はなかった。私は話を続けた。

梨「おそらく今圭一は、別の世界でおかしてしまった罪に苦しんでいる。その罪に押し潰されて、最悪」

レ「もういいよ、梨花ちゃん。理解したからそれ以上言わないで。それで、どうしたら圭一君を助けられるの？」

梨「え？レナ……」

レナは私の言ったことはまるで重要じゃないみたいな口調で私に言い放った。私は正直少し驚いている。すると今度は魅音が前に出てきた。

魅「梨花ちゃん、もしかして私達が圭ちゃんに殺されたことをとかく聞かれると思ったの？」

梨「それは……」

あやふやな返答をしてしまったが、実際のところは図星である。それは私の顔にも出てしまったらしい。

魅「梨花ちゃん、別の世界の圭ちゃんの過去がどうあれ、この世界ではちゃんと私達は生きてるし、圭ちゃんがちゃんと罪に後悔しているのなら、私は何も言わない、圭ちゃんを攻めたりもしない。」

レ「そうだよ、罪は消えないけど、それは過ぎた過去の話。それより問題なのは圭一君が死ぬかもしれないという事実だけ。どうすれば圭一君を助けだせるの？」

よくよく考えてみれば、何も心配する必要は無かった。終わった世界の罪を許すなど、とうに分かっている仲間達だということを私は平和な4年間の間に忘れてしまっていた。

梨「まず、圭一がどのくらい深刻な状況なのか、会って話をするしかないわ。」

レ「分かった。じゃあ会いに行って確かめよう、圭一君の状況を」

レナがそう言うと、全員が無言で頷き診療所を出た。圭一の家に向かって。

前原家

俺は何をしているんだろう？
何で布団を被っているんだ？

圭「・・・・・・・・」

ただ部屋の片隅で座っているだけでしか無かった。

前原家前

全員の思い、圭一を助かるために私達は圭一の家の前まで来ていた。

梨「みんなここで待ってて私が圭一に逢ってくる。」

そう私が言うと

レ「待つて、レナも行く。圭一君の過去の重荷が私を殺したことなら、レナも説得しないと」

するとそれに続くようにもう一つ声が拳がった。

魅「それなら、私も。詩音、みんなここにいてね」

ピンポン

そしてチャイムを鳴らす。するとゆっくり扉が開いた。

圭母「あら？梨花ちゃんにみんな、圭一なら帰ってるわよ。逢ってく？ちよつと気分悪そうだったけど」

梨「有り難う。ちよつと様子を見たら帰りますから。」

そう言い、私、レナ、魅音は一礼をしながら、圭一の家の中に入り圭一の部屋の前まで来た。しかし、中からは何も反応が無かった。

そしてふと魅音が先陣をきって部屋の扉を開けようとした、そのとき

圭「開けるな！！」

魅「え？」

その言葉に扉に手をかけていた魅音の手がびくつと離れた。

魅「圭ちゃん・・・」

レ「圭一君・・・」

レナと魅音がそろって圭一に囁きかけると再び戸の先から圭一の声がした。

圭「ごめん、怒鳴って・・・でも開けないでくれ。俺はみんなに逢わせる顔は無い。何の事か分からないかもしれないが」

レ「わかるよ。圭一君。赤い本に書いてあったことだね。梨花ちゃんに聞いた。別の世界で圭一君が私達を殺したことも・・・」

圭「っ!?!?・・・」

率直に述べるべきか私はためらっていたが、レナはそれをためらいもせず口にした。圭一の精神に釘を刺すような感じだったがやはり、真実は伝えなくてはいけない。

レ「でもね圭一君。レナ達が別の世界で圭一君に殺されたとしても、それは結局別の世界で過去の話なんだよ。今の圭一君に罪は無いと思う。」

魅「それに私達は、圭ちゃんを攻めたりなんて絶対にしないよ。」

二人は圭一に対する自分達の事を話した。強い気持ちを

圭「・・・ありがとう、レナ、魅音。でも駄目だどんな別の世界だろうと罪があった。なのに俺は本を読まなければ自分の罪にも気付かなかった!」

圭一が強い口調ではあるが、とても震えたような感じで答えた。その言葉を聞いて、私は一つ思い出したことがある。

梨「(そうか。どうして気づかなかった。前に罪を許した世界が存在した。)」

そうあの奇跡を起こしたカケラ。
そして今度は私が圭一に呼びかける

梨「圭一。よく聞いて。貴方の罪をとく世界を持ってきます。だから圭一、これ以上罪の意識を重ねないためにも、とりあえず本を渡して。」

圭一には言った意味は分からないだろう。きっとレナと魅音にもでも今はこう言うしかなかった。
するとしばらくして圭一が言った。

圭「分かった、本は渡す・・・」

すると戸がほんの少し開き、そこから真っ赤な本が出てきた。それを手に取りタイトルを確認する。

『鬼隠し』

梨「間違いない。後圭一、もう一つ約束して。明日まで絶対に家からでないで。」

すると少し沈黙をはさみ、圭一が呟くように

圭「・・・分かった。」
と言った。

梨「ありがとう。二人共今日はここで行きましょう。」

すると二人は少し不満そうにしていたが、一応納得したのか玄関に向かうことにした。行く前に二人は圭一に一言何かを言っていた。

魅「必ず助けるからね圭ちゃん。顔見せてくれたら昨日みたいに、料理作ってあげるから。」

レ「圭一君、何度も言うけどレナは圭一君に罪があってもなくてもみんなと同じ大切な仲間だから、だから私を、私達を信じて待ってね。」

私達は圭一の家を出た。

圭一の家から出ると、みんなが心配したおもむちで、待っていた。

詩「圭ちゃんどうでしたか？」

その問い掛けに魅音が答えた。

魅「梨花ちゃんに聞いた通り、結構深刻だね・・・何も声をかけなかったら、精神が持たないような感じだった。」

詩「！？・・・」

沙「そんな・・・」

みんな、さらに不安そうな表情を顔に出していた。私はさっきの案のため、みんなに言う。

梨「みんな、私に圭一を救う手だてがある。」

全員がそれを聞いて、私のほうを見る。

梨「それは今日にでも行えばいいのだけれど、もうすぐ暗くなる。」

だから詳しい話は明日するから明日古手神社に集まってくれ。」

すっかり忘れてのことだが、すでに夕方、何かをするには、効率の悪い時間だ。

梨「だから今日は帰って明日に備えてほしい。」

そう言うと

レ「分かった。明日絶対その方法を教えてね。」

その言葉を最後にみんな、あいさつをしつつそれぞれの方角へ帰路についた。

古手神社

羽「梨花。手だてとは何なのですか？」

私は、手に持っているカケラ（赤い本）を羽入に見せつつ話した。

梨「この問題の根源がこのカケラにあるとするならば、それを解くにもカケラが必要ということよ。」

羽「あうあう？分からないですよ。」

梨「まあ明日教えるわ。」

梨「（整理をしてみよう。このカケラ、どれもこれもその世界で重要な場所に落ちていた。

手に入れたのは、『鬼隠し』『暇潰し』『皆殺し』『昼壊し』ならば残りいくつかも、そのような場所にあるはず。」

カケラの回収、圭一を助ける。明日で終わらせよう。

5 / 5 「カケラ」型（前書き）

ゴールデンウィーク

学校 休み

5 / 5 「カケラ」型

古手神社

古手神社にあつた総封庫。私と羽入は箱の前で考え事をしていた。主題はもちろん圭一のこと

羽「これから、どうするのですか？」

梨「・・・やっぱり、「レナの学校籠城」のカケラしかないと思うわ」

圭一は「鬼隠し」のカケラを見て、仲間を殺した過去に捕われている。ならば、解き放つには仲間を信じることを学んだあのカケラしかない。

羽「僕も、それしかないと思うのです。でもどこにあるのですか？」

梨「なんで私に聞くのよ。あんたのほうが記憶の整理うまいんだからあなたの仕事でしょ。」

羽「そんなの、任された覚えはないのです。」

梨「つべこべ言わずさっさとやりなさい！10分以内よ！」

私は、そう言つて無言でキムチを取り出して無言の脅しをした。

羽「わ、わ、分かったのです。あう、あう」

梨「私は、みんなに電話して協力を求めるわ。みんなが来るまでに
思い出しなさいよ」

私はそう言っで、みんなに電話をかけるため羽入を残しその場を離
れた。

前原家

今は床に寝転んではいても、寝ているのではない。
ただ、何もする気どころか動くことも億劫になってきた。

圭「（昨日レナ達は、出るなって言っでたけど、やっぱり俺は・・・
）」

ここから俺は無意識に意識が遠のく感じがした。

圭「なんか、眠たくなって・・・」

古手神社

電話をして、5分とたたずに全員が集まってくれた。みんな軽く息
をきらしている。

少し息を整えてレナから話しかけてきた。

レ「梨花ちゃん。昨日言っでた圭一君を助ける方法、そろそろ教え
てもらえないかな？」

単刀直入のレナ言葉。その発言に他のみんなも、早く息上がりを戻そうとしている。

羽「（あうあう）。みんなとても焦っているのです。」

梨「（あんたもでしょ羽入。私だって、早く行動に移したいけどみんなにわかりやすく説明しないと。」

圭一を過去の呪縛から解く方法を私はみんなに説明を始めた。

カケラの記憶に囚われてしまっている心と人を助け、救い出す方法は時間をかければたくさんある。でも、今は時間に猶予はない。一番早く助け出す方法、それもまたカケラによるもの。

梨「圭一が、過去の記憶で罪を背負ってしまった世界があったとすれば、他の世界でも似たようなことがあった。」

沙「？。どういうことですかの梨花。」

沙都子が理解できないような顔で聞いてきた。すると

詩「つまり、似たようなことが起こる世界はあっても、それにたいするのは圭ちゃんじゃない時もあったということですね。」

詩音が分かりやすく、まとめて私はそれに頷く。そして私は話を続けることにした。

梨「圭一は、間違った選択肢で自分が罪を負ってしまったこともあれば、逆に他の人が間違えてしまった時は助けようと必死に頑張ってくれていた。」

「「「「「.....」」」」」

全員顔には出していないけど、私の発言を聞いて少し動揺しているのが伺えた。

わざと遠回しな言い方をしてみたけどみんなには分かるみたい。

羽「梨花・・・遠回しなのは逆に気を悪くしますです。」

梨「ごめんなさい。私は気を使ったつもりだったんだけど逆効果だったみたい・・・」

みんなの顔は少しずつ冷静に戻ってきていた。

気持ちの整理をしていたのか、私には分からない。

でもこれは受け入れ、学ばなければいけないこと。

例えば、竜宮レナ

例えば、園崎魅音

例えば、北条沙都子

例えば、園崎詩音

例えば、北条悟史

そして、前原圭一ももちろんのこと、それから羽入。

そして私も。

梨「私達が選択肢を間違えようとすれば圭一は必死に助けてくれた。」

そう圭一を助ける最善の方法。

梨「私達を助けようとしてくれた、世界の記憶を見せる。それが圭一を助け出す方法。」

私がそう言つと、みんな決意したような顔になった。みんな思いが

よりいつそう深まったように見えた。

梨「そこで、皆にはこれから私が言う場所に行ってきたほしいの。」

カケラのあると思われる場所を私はみんなに言っていく。羽入の記憶を頼りにしているので自信はないが信じるしかない。

レ「じゃあ梨花ちゃん、羽入ちゃん。先に行ってるから早くきてね。」

梨「ええ、すぐ行くわ。」

そう言うとしなは外に駆け足で向かっていった。他のみんなも私が言った場所に向かってくれている。私もすぐに向かうつもりだったのだが。

梨「羽入、話って何よ。」

羽「あう。これを見てほしいのです。」

そう言うとしなは、後ろに隠していた手を出した。その両手の上には見知らぬ物があった。しかしその見知らぬ物がただの物ではないことは一目でわかる。

梨「羽入・・・これは？」

羽「これは、さっき偶然祭具殿で見つけたのです。きっとこれは完成したものなのです。」

梨「完成？　どういうこと。これはカケラとは違うの？」

その物とは「鬼隠し」や「暇潰し」のカケラと同じ本の形をしている。しかしこの表紙は赤ではなく緑だった。そして羽入は私にタイトルを見せた。

梨「さ、賽殺し？　・・・これは、もしかして『罪なき世界』？　・・・」

羽「その通りなのです。」

梨「でもあの世界のカケラが完成ってどういう？　・・・」

私は全く羽入の言っている意味がまだ分からなかった。

羽「この世界に飛ばされた梨花は元の世界に戻って、世界を比較している学んだのです。」

梨「ええ。」

あの世界は、誰一人仲間達に罪の無い世界だった。それは思い出や心に傷が無く誰も悲しい過去が無いという利点があったけど、それと同時にあるものが当たり前と思い、大切なものの価値を仲間達はほとんど知らなかった。私はあのとき帰ってきたときに思った。罪があることは辛いことだけどそこから人は大切な物の価値や、学ぶことがたくさんあることに。

羽「梨花を学ばせ、この世界はきつと意味を果たしたのです。この赤ではなく緑はきつとその証なのです。」

成る程ね。

圭一はカケラを読んで閉じこもってしまったけど、それも学んだ証。それを乗り越えたとききつと「鬼隠し」のカケラの色は変わる。

梨「分かったわ、羽入。必ずほかのカケラも役目を果たさせるわ。行くわよ！」

羽入「分かったのです。」

私と羽入は急いで、神社の階段を降りていく。私はレナの後を追ひ、羽入はどこか違う場所に向かっていった。

5 / 5 「カケラ」型（後書き）

一体、何ヶ月ぶりの更新か、さっぱり覚えていませんが、やっと書いて良かったー！。

でも伏線の回収もしくちやいけないのに、このペースじゃいつ小説内で1年たつのかな？。

何はともあれ次またお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3876h/>

ひぐらし～After school days～

2010年10月10日02時26分発行